兵庫県に現存する能舞台の平面と社殿構成に関する研究

RESEARCH ON THE COMPOSITION OF SHRINE BUILDINGS AND THE PLAN OF NOH STAGES IN HYOGO PREFECTURE

大岸 文夫*, 佐藤 勝行**
Fumio OGISHI and Katsuyuki SATO

We made the investigation and the research on the composition of the shrines, the Noh stages and the galleries of existing 51 Noh stages in the southern part of Hyogo Prefecture. The composition of the shrine takes mostly general modern form and are classified in fourteen kinds of 7 types. Most of the passages take passed on the right side of the Noh stage.

When it passes on the right side of the stage, they made the temporary Hashigakari (Bridge form passageway) or, the bridge which could be easily taken off. For the fundamental module of the Noh stage they have used the Kyo Ma (1969 ■■=1 ken) Chukyo Ma (1908 ■■=1 ken) and Kanto Ma (1818 ■■=1 ken).

Keywords: Noh Stages, Hyogo Prefecture, Composition of the Shrine, Gallery, Fundamental Module
能舞台、兵庫県、社殿配置、棧敷、基準値

1. はじめに

本研究は、神社境内における能舞台・演能場の設計学理について、猿楽発祥地¹⁾を抱える近畿圏の神社に現存する能舞台・演能場から探求・分析を目的とし、建築学的に論究するものである。これまで、能舞台研究は能楽史²⁾とした論究が多く、建築学的には建築史的研究³⁾、劇場史的研究⁴⁾、組立舞台の研究⁵⁾、『匠明 殿屋集』⁶⁾『新編武家雛形』⁷⁾などを基幹本とする邸内の能舞台研究⁸⁾、そして特定域の神社に現存する能舞台⁹⁾について論じられているが、能舞台が拝殿や神楽殿からの進化説¹⁰⁾がある中で近世の神社に能舞台・演能場が成立する過程について建築学的に評価する必要がある。

本稿で対象とする兵庫県は、東に猿楽発祥地とされる大和・山城に接する摂津、丹波、瀬戸内側の播磨、淡路、そして日本海側の但馬の国々からなる。西からの芸能文化伝播の要所として、民衆の鎮守社において、能、人形劇、歌舞伎など祭祀芸能が伝承されてきた。

兵庫県内の神社における能舞台探査は、『播磨鑑』¹¹⁾に舞台、舞堂、橋掛、楽屋と記され、『兵庫県神社史』¹²⁾では棟札や能を含む祭祀記録などが詳述される。昭和40年代、これら地誌を下に角田一郎氏を中心とする演劇学・歴史学・民俗学・建築学専攻者ら兵庫県の舞台研究グループの調査により、機関誌『歴史と神戸』¹³⁾に民俗芸能的な側面と能舞台の分布や建築的・歴史的概況を発表し、平成8年(1996)、『兵庫県の農村舞台』¹⁴⁾が刊行されている。

また平成13年(2001)、兵庫県教育委員会により各市町村に対し実地調査が実施され、前述のグループ調査を踏まえた54社のリストを作成し、能舞台現存51社としている。これら調査報告は能

舞台所在や歴史的概況、柱間寸法と若干の特徴を記すが、能舞台・演能場としての総合的な評価・論及はなされていないものとする。

いっぽう、神社建築は通常本殿建築の形式を取扱うことが顯著だが、諸行事に対応する他の建築を含めて社殿と総称される。神を鎮座し祭祀と参拝に応える信仰の性格を備える施設とされ、神輿渡御、御旅所祭など町村全域を巻込んだ祭祀に能楽・翁などが加わり、参道を含めた境内の構成が社の性格を表すものである。特に近世の近畿圏においては「一般形式」¹⁵⁾とする流造りの本殿を上層に置きその下に拝殿を直線的に置く例が多く、その規模や構成方法は村落の地形や組織・諸規程により異なるものと考えられ、本地域の当該神社では能舞台・演能場を付加した社殿構成としている。

そこで本論は兵庫県下の神社に現存する能舞台に焦点をおき、建築計画の立場から、特に能舞台平面と社殿構成そして棧敷構成の検証を行い、能舞台の展開過程とその特質を明らかにするものである。

2. 研究対象および調査・研究概要

調査期間は平成14年8月から平成17年1月の間とした。能舞台探索は、地誌¹⁶⁾、神社誌¹⁷⁾、神社関連報告書¹⁸⁾、県内の神社建築や鎮守社における能・翁など民俗芸能が検索可能な調査書¹⁹⁾、そして前記の県教育委員会作成の能舞台一覧などを基礎資料とした。

本稿は、『匠明 殿屋集』、『愚子見記』²⁰⁾、『書上』²¹⁾に論じられる邸内や社寺における「本舞台」、「後座」、「地謡座」、「橋掛」などを能舞台設計論と捉え、また神社の社殿構成論を展開する山内泰明『神社建築』²²⁾「社殿」・「神社の境内」を論拠とし評価を行う。

* 日本工業大学工学部建築学科 講師

** 日本工業大学工学部建築学科 実験講師

Lecturer, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering Nippon Institute of Technology
Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering Nippon Institute of Technology

図1 兵庫県神社に現存する能舞台の社殿類型別分布図

本研究は、「兵庫県神社史」に記載される2140社²³⁾から、県の能舞台リストを含め、能舞台の手掛かりとなる舞台、舞堂、神楽殿、翁、猿楽、能など舞台や能記録の残る190社について現地調査を行い、能舞台保有の社に対し次の調査を順次実施した。

- (1) 能舞台所有および廃絶とする神社に対して建設年代、舞台形式と形態、寸法など能舞台概況や演能に関するアンケート調査。
- (2) 能舞台現存とする神社に対し(1)に関するヒアリング調査、社殿・能舞台・付属施設の実測、写真・VTR撮影。
- (3) 評価資料として、能舞台一覧表(名称、社殿構成類型、舞台類型、各部寸法、橋掛、建設年代など)、能舞台分布図、社殿配置図(演能場領域を検証)、能舞台平面図、桝敷構成図などの作成。

3. 結果と考察

前述の190社を調査した結果、県教育委員会による能舞台一覧54社の内、現存46社、廃絶8社とし、新たに5社追加して現存51社とした(表1)。しかし本調査期間中、小野市神明神社では老朽化のため廃絶され、他にも危機的な能舞台が多く見受けられた。いっぽう、県中部から北部に掛けて歌舞伎や人形芝居などいわゆる「農村舞台」²⁴⁾が多数現存し、一部では舞殿や拝殿兼用舞台において翁が伝承²⁵⁾されている。

能舞台を所有する神社分布は、慶長5年(1600)関ヶ原の役後、姫路城に入封した池田輝政²⁶⁾が築いた6つの支城の内、三木・明石・高砂・龍野の地域²⁷⁾に集中していた。農村では宮座²⁸⁾による氏神信仰が伝承し、河川の水運や新田開発が行われ、酒造米、綿花、菜種などが盛んに栽培された地域でもある。この地域は、いわゆる播磨国とする播磨灘に面した加古川河口から上流域の兵庫県南部に集中している(図1)。

表1 兵庫県の神社に現存する能舞台一覧表

No.	所在地	神社名称	社殿構成	舞台類型	能舞台主要部寸法 (単位: 尺)					橋掛	建設年代 (※旧・前代舞台)
					開口×奥行	東間	正面東間	奥行	開口		
1	明石市魚住町中尾	住吉神社	I-3	C-2	16.84; 16.06	2	7.92	7.06	3.20	64	寛永4年(1627) 建立
2	神戸市西区玉津町	若宮神社	II-2	C-5	13.89; 13.89	2	6.96	7.62	2.62	90	
3	神戸市西区磯谷町	若宮神社	II-2	D-1	13.03; 13.06	2	6.51	6.46	×	90	※安永2年(1773) 建立
4	神戸市西区平野町	八幡神社	I-2	D-2	15.01; 15.11	2	7.50	7.92	×	80	
5	神戸市西区平野町	春日神社	IV-2	C-3	14.62; 14.65	2	7.31	8.77	3.40	60	
6	神戸市西区磯谷町	磯谷神社	II-2	A-4	16.15; 16.17	2	8.09	6.36	×	×	
7	神戸市北区山田町	六条八幡神社	I-2	0-1	16.06; 16.15	2	8.02	撤去	×	×	
8	三木市志染町	御坂神社	I-2	D-3	17.46; 16.95	4	4.36	8.48	×	74	文化4年(1807) 再建・増築
9	三木市本町	大宮八幡宮神社	I-1	A-2	16.02; 16.00	2	8.01	6.98	×	×	天和2年(1682) 修理
10	三木市若宮	若宮神社	II-2	A-3	16.02; 16.04	2	8.01	6.60	×	90	元治元年(1864) 修理
11	三木市久留美	八幡神社	I-1	A-3	15.84; 16.83	2	7.92	6.60	×	77	文化・文政年間再建
12	三木市福川町	九社神社	II-2	B-3	16.15; 13.13	3	5.04	6.07	×	×	
13	三木市福川町	三坂神社	III-2	A-3	16.34; 16.34	2	8.17	6.50	×	×	
14	三木市福川町	御通神社	IV-2	B-3	18.00; 12.67	3	6.00	6.41	×	×	文政2年(1819) 建立
16	三木市福川町	六社神社	IV-2	B-3	16.00; 12.99	3	5.33	6.00	×	×	
16	三木市吉川町	福原神社	I-2	B-2	16.78; 12.74	2	7.89	6.37	×	×	
17	美濃郡古川町	新宮神社	I-2	B-2	16.00; 13.00	3	6.00	6.00	×	×	
18	三田市下田野久堀	大蔵神社	I-2	0-1	12.98; 12.98	2	6.49	無	×	×	
19	三田市天神	天満神社	V	0-1	17.35; 17.40	3	6.79	無	×	×	寛政3年(1749) 再建・増築
20	三田市上庄	駒子八幡神社	V	0-1	17.70; 17.70	3	6.90	無	×	×	享保3年(1718) 本殿・増築
21	三田市大川瀬	住吉神社	II-2	C-1	15.02; 13.28	2	7.55	5.01	版設	90	享保11年(1728) 増築
22	加東郡東条町秋津	住吉神社	I-2	B-2	15.04; 12.98	2	7.62	5.19	×	×	
23	加東郡東条町黒谷	若宮八幡神社	I-2	B-2	15.19; 12.62	3	5.06	5.01	×	×	
24	加東郡東条町天神	一之宮神社	I-2	B-2	16.02; 13.00	2	7.51	4.98	×	×	
25	加東郡東条町新定	若宮八幡神社	II-2	B-2	13.86; 9.81	2	6.96	6.50	×	90	
26	加東郡東条町吉井	住吉神社	II-3	B-2	14.54; 13.06	2	7.27	5.03	×	×	
27	加東郡東条町厚利	山王神社	IV-3	A-2	13.00; 8.88	2	6.60	8.87	×	×	
28	加東郡社町	佐保神社	I-2	B-2	16.20; 13.00	3	8.10	6.48	×	×	
29	加東郡社町	木梨神社	VI	B-2	14.03; 12.98	2	7.01	4.01	×	×	
30	加東郡東町	住吉神社	III-1	A-2	13.82; 13.01	2	6.91	5.00	×	90	
31	加東郡滝野町	春日神社	I-1	A-1	16.60; 16.46	×	RC	5.51	×	×	
32	西脇市比延町	比延住吉神社	VI	B-1	12.81; 9.62	2	6.46	6.66	×	×	明治2年(1827) 再建・増築
33	小野市小田上町	垣田神社	I-2	B-2	16.30; 12.68	3	5.10	5.92	×	×	貞享3年(1686) 再建・増築
34	小野市久保木町	住吉神社	I-2	A-2	12.96; 13.02	2	6.47	6.48	×	×	享保3年(1718) 本殿・増築
36	小野市河合中町	新宮神社	I-1	A-2	13.30; 13.30	2	6.66	6.30	×	×	
36	小野市鹿井町	神明神社	III-2	B-4	16.00; 12.81	3	5.33	6.40	×	×	大正15年(1928) 改築・増築
37	加西市津引町	八幡神社	I-2	B-3	14.98; 13.53	3	4.99	6.48	×	90	貞享元年(1685) 建立・増築
38	加古川市北方町	八幡神社	I-1	D-4	16.00; 16.00	2	7.50	7.00	4.00	90	※寛永4年(1685) 建立
39	加古川市平荘町	平荘神社	I-1	A-3	16.12; 16.94	3	6.37	7.11	×	86	貞享4年(1687) 再建・増築
40	加古川市上庄町	上之住神社	IV-1	C-6	16.00; 16.94	3	5.33	8.91	3.16	×	享和2年(1804) 再建・増築
41	加古川市神野町	稲根神社	II-2	B-2	16.09; 12.97	2	8.04	6.00	×	104	文政11年(1828) 歴代増築
42	加古川市尾上町	浜宮天神社	I-2	A-3	16.86; 16.82	2	7.93	6.86	×	×	
43	加古川市加古川町	治神社	IV-1	A-2	16.06; 16.06	2	8.02	6.86	×	80	
44	高砂市米田町	天神社	II-1	A-3	12.84; 12.85	×	現土間	6.43	×	90	
45	高砂市阿部町	生石神社	VI	0-2	13.00; 13.00	×	布基礎	×	×	90	
46	高砂市黒石町	黒石神社	I-1	A-1	16.97; 16.92	×	布基礎	7.11	×	69	寛永2年(1625) 再建・増築
47	姫路市大塚町	天満神社	IV-1	A-3	16.08; 13.20	2	7.54	6.60	×	90	平成10年(1998) 社務所
48	姫路市白浜町	八幡神社	VI	A-2	16.29; 19.57	2	8.14	6.58	×	×	
49	大塚町山崎町	八幡神社	II-1	A-3	18.09; 18.12	3	6.03	6.60	×	70	元禄12年(1699) 建立
50	篠山市黒岡	春日神社	VI	C-4	19.60; 19.62	3	6.50	9.40	3.00	82	文久元年(1861) 建立
51	川西市多田町多田所	多田神社	VI	0-1	18.00; 18.06	×	現土間	撤去	×	×	大正12年(1923) 増築

3-1. 社殿構成

当該神社の社殿構成は、本殿、拝殿などを「一直線型」²⁹⁾に配置した「普通一般的形式」³⁰⁾とし、それに能舞台を加えた事例が多い。その社殿構成は、一の鳥居から正参道がほぼ直線的に伸び、能舞台や外拝殿の建つ奉務と参拝のための「清雅区域」³¹⁾・平坦地(以下二ツと称す)へと続き、それより1段上に内拝殿、幣殿、祝詞殿の建つ「清寂区域」³²⁾、そして最上位に向拝の付く本殿が建つ「神聖区域」³³⁾が展開する。神社での各種祭祀は、通常このように一の鳥居から中心軸線上に展開する主要建築に向かって進行し、拝殿へと導かれる。ここでの拝殿は本来他の用途を兼ねないとするが、神饌、屋台置、桝敷、そして翁や地芝居の舞台に併用される。したがって、祭祀・芸能は「清雅区域」から「神聖区域」へ向かって奉納とする。つぎに社殿内における演能場構成を評価するため、社殿、能舞台、正参道などの中心軸と方向性、そして動線計画から次の7類型(図4)に分類し、能舞台・橋掛などの立地条件および桝敷構成に関連して検証を行う。

I: [社殿/正参道一軸形] 本殿、幣殿、拝殿、能舞台、楼門、山門、正参道、鳥居の中心軸が一直線で、参拝路は手水舎が本殿の右側に建つことから、本殿の右・能舞台後方から左を回るように設定される。

Ⅱ：〔社殿／右正参道平行二軸形〕 能舞台を含む社殿の中心軸が一直線で、参拝路は手水舎が本殿の右側に建つことから、鳥居から二ワ迄の正参道の中心軸が本殿の右に平行移動する。

Ⅲ：〔社殿／左正参道平行二軸形〕 能舞台を含む社殿の中心軸が一直線で、正参道の中心軸が本殿左・能舞台右に平行移動し、橋掛を仮設とするか一部揚床式とする。

Ⅳ：〔社殿・正参道／左舞台平行二軸形〕 社殿から正参道などの中心軸が一直線で、能舞台の中心軸が本殿左に平行移動する。

Ⅴ：〔社殿・正参道／右舞台平行二軸形〕 社殿から正参道が一直線で、能舞台の中心軸が本殿右に平行移動する。

Ⅵ：〔社殿・正参道／舞台交差二軸形〕 社殿から正参道の中心軸が一直線で、それに能舞台中心軸が交差するように置かれ、舞台正面は二ワ中央部に面する。

なお、能舞台が移転された場合、旧位置の形式として取扱った。

Ⅶ：〔社殿／正参道交差二軸形〕 能舞台を含む社殿の中心軸が一直線で楼門、正参道、鳥居の中心軸が社殿軸に鈍形³⁴⁾に交差。

この類型では、一の鳥居から本殿に向かう動線計画から、能舞台を参拝路の右側に置く形式（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ）40社と最も多く、参拝路の左に置く形式（Ⅲ・Ⅴ）5社、能舞台軸が社殿軸に直交する形式（Ⅵ）4社、そして参道軸線が社殿軸に交差する形式（Ⅶ）は僅か2社である。一部では祭事の変化から能舞台を境内の脇へ移築した社もあるが、タイプⅥを除く大半の能舞台が本殿側に正対して建ち、『明治新撰播磨名所図絵』³⁵⁾（図2）からも当時の

明石市住吉神社旧図

高砂市高砂神社旧図

図2 明治新撰播磨名所図絵〔出典：中外書房 復刻版〕

様を確認できる。また、タイプⅥにおける生石神社は御旅所の正面に建つことからタイプⅠと考えることもでき、木梨神社でも割拝殿前の二ワが不自然に広く、能舞台がやや拝殿側に向くこともあり本殿正面・二ワ中央部に建っていた可能性も否定出来ない。

3-2. 棧敷構成

境内における棧敷構成は、棧敷割図³⁶⁾や絵馬などから推察できるが、現在、県内の神社において僅かに能が開催される明石市住吉神社、三田市住吉神社、篠山市春日神社の各境内二ワに設置される状況と二ワに専用の棧敷を設ける事例から考察したい。

東条町山王神社絵馬

東条町山王神社拝殿に掛る明治期の祭礼絵馬（写真1）であり、藁葺（現瓦葺）の能舞台が現在地・本殿左に描かれている。絵馬からは、屋台が正参道から境内に担がれ、二ワを練り、能舞台正面の本殿左傾斜地を棧敷としていることが分る。

図3 類型別社殿配置図

図中注記 割：割拝殿 本殿数字（2.3.4）：本殿棟数 右：本殿右側 左：本殿左側 移：移動（18位置） *：かつて存在 絵：絵馬殿兼用

図4 社殿配置類型図

篠山市春日神社

当社は篠山城趾北側に鎮座し、能舞台は文久元年（1861）領主青山忠良創建³⁷⁾とされ、年3回能が開催される。境内の棟敷構成は、東向きの本殿・拝殿に南側にやや移動した能舞台が正対し、その間の奥行八間強の二ワに椅子席を設置（写真2）する。

大川瀬住吉神社棟敷構成（10年毎、平成15年4月新能開催）

当社は三田市の北北西、大川瀬の集落北部台地に鎮座する。社殿構は南向の流造の本殿、一間半隔てて割拝殿、そして約六間半隔てた正面に能舞台が橋掛と長床を付設する。正参道は急な石階段状で社殿中心軸から西へずらしたタイプⅡとし、社務所は一の鳥居の左

である。本能舞台は、享保11年（1726）創建棟札が残し、平成15年全面的に修復が行われ、床下から音響効果のためと思われる数個の樽（写真5）が出現した。演能場は、北向きの舞台に地謡座を仮設、鏡板部に絵幕を掛け、橋掛が直角に繋がり、それに楽屋・棟敷となる長床が接続する。棟敷割（図5）は、建物に囲まれた南北約六間半、東西十五間の範囲とし、脇柱寄りに花道を取り、竹と縄による約七尺四方の枡席が、舞台正面に6拵6区画、橋掛前に4拵と1台座、拝殿脇に1～3拵が設営される。

写真1 東条町山王神社絵馬

写真2 篠山市春日神社棟敷

写真3 大川瀬住吉神社棟敷

写真4 加古川市志方八幡神社

写真5 大川瀬住吉神社

図5 大川瀬住吉神社新能棟敷割配置

図6 社殿内の参拝路動線と棧敷構成図

明石市住吉神社においても拝殿と能舞台間のニワを棧敷とし、加古川市志方八幡神社（写真4）では外拝殿前のニワがやや広く取られ、そこから1段下がった土地に能舞台・鏡の間に建ち、その間の傾斜地に階段状の棧敷席を設けている。そのほか、能舞台正面に建つ横長の割拝殿やニワ側面の長床が棧敷に転用される。

つぎに類型化された社殿構成における参拝路動線と能舞台・棧敷構成を検証すると（図6）、本殿・拝殿正面に能舞台が建つタイプⅠ・Ⅱ・Ⅲはニワ奥行に制限がある場合は能舞台形状に変化が

生じ、正面参拝路が棧敷により占有される。タイプⅢ・Ⅴでは参拝路上に橋掛を仮設することからニワの外側に迂回路を必要とする。しかし、タイプⅣは能舞台が参拝路中心から平行移動した為、動線からは独立した演会場構成が可能となる。またタイプⅥは能舞台正面を本殿側としないが、タイプⅥ・Ⅶは棧敷長手方向に通路が横断するが棧敷後方に迂回でき、鏡の間や裏方への動線計画に自由度が増し、そして傾斜地を縦走する社殿軸からそれに直交する水平・横方向の土地利用が可能となるものと考えられる。

3-3. 能舞台平面形

論拠とする能舞台設計論において、『匠明 殿屋集』『舞台』間三間四方後座九尺すへし、橋掛幅七尺、長五間三間割可用、いっぽう『愚子見記』『舞台』三間四方後座九尺脇座二尺四寸也、禁裏舞台三間四方後座一間半脇坐間半とし、本舞台³⁸⁾形状と広さ、後座奥行、地謡座巾、橋掛長さ、舞台高などが記される。観世太夫が江戸幕府へ提出した『書上』では、舞台法式古来大場三間四面中場二間半四面小場二間四面とするニワ（場）による設計概念が記され、能舞台設計学理を解明する要素と捉えることが出来る。

当該能舞台平面形の検証を行うと、本舞台のみ、本舞台に後座を常設、それに地謡座を常設または仮設、さらに橋掛を常設または仮設、後見座が確保された後座の常設、鏡板や鏡の間の常設、そして本舞台の間口と奥行寸法が異なるなど、各部寸法も含めると様々な構成方法が存在する。そこで、当該能舞台平面形の評価にあたり上記要素から5類型（図7）に分類し、設計論を下に各要素別に評価し論究を行うものとする。

図7 能舞台平面類型図

図8 能舞台構成別平面図

图9 能舞台平面類型別分布図

0：ほぼ正方形の本舞台のみとし、四方開放と鏡板付きがある。

A：ほぼ正方形の本舞台に後座が付き、後方壁面を開放、柱を1～3本建て壁下地を見せるもの、鏡板を付けるものがある。

B：間口＞奥行とする偏平の本舞台に後座が付き、後方壁面を開放とするか、柱を1～2本建てて壁下地を見せるものがある。

C：本舞台に後座を付け、地謡座を仮設または常設とし、後座後方の壁面を開放とするか、柱を1～2本建てて壁下地を見せるもの、鏡板を付けるか、絵幕を掛けるものがある。

D：本舞台に後見座を設けた後座を付け、一部では地謡座を常設し、後座後方の壁面を開放とするか、柱を1～3本建てて壁下地を見せるもの、鏡板を付けるものがある。

この類型から、ほぼ正方形本舞台に後座が付くAタイプ20棟と最も多く、続いて舞台間口に対して奥行が狭い本舞台に後座が付くBタイプ16棟、本舞台に後座と地謡座を常設か仮設とするCタイプ6棟、本舞台のみとするDタイプ5棟、後見座が確認できるDタイプ4棟とする。したがって、本舞台の形状を問わなければ本舞台と後座のみの平面構成は36棟(70%)である。

類型別分布域(図9)の特徴を見ると、A・Bタイプは加古川本・支流域に広がり、C・Dタイプが明石市を中心として三木市・加古川市辺り、そして0タイプが三田市を中心とした東側に分散する。

(1)本舞台平面構成

今日、舞台の広さは京間三間とする風潮はあるが、前述の設計論から八尺間二間：十六尺、一丈八尺=三間：十八尺、京間三間：十九尺五寸、中京間三間：十八尺九寸などが挙げられる。いっぽう、伏見城遺構とされる沼名前神社能舞台³⁹⁾は、間口十七尺六寸とし、三間式と考えると一間：五尺八寸六分、束間二間式と考えると一間：八尺八寸となるなど、設計値を判定する幾つかの尺度が存在する。

ここでいう一間の長さを検証する場合、真々制と内法制について留意する必要があるが、内法制は畳割が関わる⁴⁰⁾ものと考えられることから、能舞台設計論では一般的に真々制を用いるものである。本舞台は、演技や空間上の名称(図12)が付けられ、京間三間式の広さでは1座:六尺五寸四方(1坪)×9座とし、中場は一辺につき約1尺短いことから1座:五尺五寸四方(0.7坪)、小場は1座:四尺五寸四方(0.45坪)とし演技に若干の制約が加わる。

本舞台平面寸法と平面形

本舞台平面寸法は、京間三間、同二間半、同二間、中京間二間半、関東間三間、同二間半、他に八尺間二間など間口と奥行がほぼ同寸とする正方形の分布があり、間口が関東間三間～二間半、京間二間半～二間、八尺間二間などに変化し、奥行がほぼ十三尺：京間二間とする扁平形の2系統の分布（図10）が見られる。この設計値は、神社の格式・規模・組織、そして二ワの広さなどから『書上』の3種の「場」による3通りの制約が掛かったものと考えられ、舞台奥行を詰めた扁平形は前項で指摘した二ワの奥行きが狭い場合の策と思われる。京間や関東間などの設計論がなぜ混在するのか疑問も残るが、論拠とする設計論にも同様の値が存在することから影響が推測でき、篠山市春日神社は大名寄進とする為、論拠とする設計論または『結構書』⁴¹⁾による京間三間を遵守したのと考えられる。

束間寸法

一間の設計値を評価するには、実測の柱真々寸法から割出しも可能だが、「束間」を掲げる設計論⁴²⁾を根拠に、舞台の床束（表1）（図12）本数から割出す方法も有効な手段と考える。ここで、床束割の検証を試みると、二間式：30社、三間式：15社、四間式：1社、不明：5社である。これらは、二間式は9社が八尺辺りとし、七尺～七尺五寸、五尺五寸辺りが採用され、三間式は六尺五寸、六尺、五尺辺り、四間式は四尺三寸としている。この設計値は、京間、中京間、関東間などの設計論に該当し、他に七尺～七尺五寸、五尺など他の設計論⁴³⁾に該当すると思われる値が存在する。

図10 本舞台寸法比較図

図11 橋掛付能舞台図

図12 能舞台平面構成図

年代	No.	所在地	神社名称	能舞台類型				本舞台平面設計論（間口・奥行）										建築年代			
				D 後座付 正方形	C 後座付 長方形	B 後座付 長方形	A 後座付 正方形	京間				中京間		六尺一寸間		間口間			五尺九寸間	五尺八寸間	
								三間	二間半	二間	一間半	三間	二間半	二間	一間半	三間	二間半				
				四方吹放し 正方形	後座付 正方形	後座付 長方形	後座付 長方形	後座付 長方形	八尺間 二間	三間	二間半	二間	一間半	三間	二間半	二間	一間半	六尺一寸間 二間半	三間	二間半	三間
1600																					慶長8年（1603）江戸開府
1625	46	高砂市	高砂神社																		寛永2年（1625）
1650	1	明石市	住吉神社																		寛永4年（1627）
	20	三田市	八幡神社																		享和3年（1854）
	38	加古川市	八幡神社																		寛文4年（1665）
	9	三木市	八幡神社																		天和2年（1682）修理
	39	加古川市	平荘神社																		寛永4年（1686）
1700	45	大東郡	八幡神社																		元禄12年（1699）
	34	小野市	住吉神社																		享保3年（1719）
	21	三田市	住吉神社																		享保11年（1726）再建
1750	15	三田市	天満神社																		享保2年（1749）再建
	3	神戸市	若宮神社																		安永2年（1773）
1800	8	三木市	御幸神社																		文化4年（1807）再建
	11	三木市	八雲神社																		文化・文政年間再建
	14	三木市	御幸神社																		文政2年（1819）
1850	41	加古川市	瑞穂神社																		文政11年（1829）修理
	40	加古川市	上荘神社																		嘉永2年（1849）再建
	50	篠山市	春日神社																		文久元年（1861）
	10	三木市	忠孝神社																		元治元年（1864）修理
	37	加西市	八幡神社																		寛永元年（1665）
1870	33	小野市	瑞穂神社																		寛永3年（1667）
	32	西脇市	住吉神社																		明治2年（1869）
	51	川西市	多田神社																		大正12年（1923）修葺
1925	36	小野市	神明神社																		大正16年（1926）改築

凡例		間口・奥行		間口		間口・奥行		近辺
----	---	-------	---	----	---	-------	---	----

凡例 □: 間口・奥行 □: 間口 〇: 奥行 △: 近似的

図13 兵庫県の神社に現存する能舞台建設年代順マトリックス図

年代的考察

現在、建設年代の特定される能舞台は棟札・調査報告書などから23棟(45%)である。江戸初期から大正期に掛けた約300年間、過酷な条件の中で建替・修理・改築・移築などが行われ、屋根形状や葺材が変化した舞台も多く、当初の状態を維持するのは困難であったものと思われる。しかし、明治維新の変革にも関わらず、神社や能舞台の性格が大きく変化しないことから、また明治期まで当該神社でも演能があったとする報告⁴⁴⁾もあり、本舞台平面形に限るとほぼ当初の形態を維持しているものと考えられる。そこで、年代が特定される能舞台に限り、能舞台類型と本舞台設計論に関するマトリックス図(図13)を用いて以下に年代的検証を行う。

i. 能舞台類型上の特徴：タイプA・C・Dは江戸前期から中期に掛けて多く、扁平形本舞台は江戸初期から存在するがタイプBに限ると江戸後期とし、四方吹放しのタイプ0は3棟であるが後座が外された多田神社能舞台を除くと江戸前半の建設である。

ii. 本舞台設計論・八尺間二間式：ほぼ江戸期を通して見られ、間口、奥行同寸の正方形舞台が4棟であり、禁中能舞台に用いられたとする本設計論が広く認識されていたものと考えられることができる。

iii. 本舞台設計論・京間：三間式は江戸後期に篠山市春日神社の正方形舞台が1棟とし、二間半、二間の正方形舞台が江戸中期に3棟、間口、奥行が異なり、かつ他設計論を併用する扁平形舞台が江戸後期の5棟とする。また、十六尺は本設計論の二間半の近似値でもあり、その場合は江戸初期から二間半の舞台が存在したことになる。

iv. 本舞台設計論・中京間：三間式はなく、二間半式正方形舞台が江戸中期に三木市八雲神社の1棟とし、江戸前期に他設計論を併用する間口二間半式の1棟、江戸後期に奥行二間式の2棟とする。

v. 本舞台設計論・関東間：三間式正方形舞台は江戸中期の山崎八幡神社と大正期に移転された多田神社の2棟とし、二間半式正方形舞台は江戸初期に加古川市志方八幡神社の1棟、他設計論を併用する間口を三間式・二間半式の3棟と奥行二間半式の1棟である。

vi. その他の本舞台設計論：正方形舞台、0タイプとする江戸初

期に五尺八寸間三間式の三田市駒字佐八幡神社の1棟、江戸中期に五尺八寸間三間式の三田市天満神社の1棟、そしてタイプBとする江戸後期に間口を六尺一寸間三間式とした小野市柿田神社の1棟、間口を五尺八寸間三間式とした三木市御坂神社の1棟である。

このように、建設年代と混在する平面設計論および分布的特徴の検証を行った結果、特筆できるのは、三間式は社格や城主の関係など特定な神社に限られた可能性もあるが、八尺間二間式が根強く採用され、二間半式が比較的多く採用されたものと考えられる。

(2)後座、地謡座、橋掛について

i. 後座：当該能舞台における後座構成は、0-1では後座を取外した2社と四方吹放しの3社が未設置、0-2では本舞台に含まれると考えられ、A~Dでは45社が常設、Dの4社は後見座が付く。その奥行きは、篠山市春日神社能舞台が最も深い九尺四寸、15社で六尺五寸前後、9社で五尺~五尺五寸、6社で七尺~七尺五寸、5社で七尺九寸~八尺九寸、4社で六尺、2社で六尺三寸、1社で四尺などとする。これらは、本舞台奥行との比率を1/3~1/2とする事例が多く、浅い舞台は二ワ奥行から減じたものと考えられる。

ii. 地謡座：社殿類型タイプI・II・IVは参道が舞台左を離れて通る場合に限り5社が地謡座を常設、参道が舞台脇を通る大川瀬住吉神社では仮設とし(写真5)、タイプVIIの篠山氏春日神社では本格的な地謡座が付く。しかし他社では痕跡がない為仮設式と考えられる。これらの設計値は、二尺五寸、三尺、三尺一寸、三尺二寸、三尺四寸、四尺とし、関東間、中京間、京間、八尺間の半間を設計値とする。地謡座の付く本舞台平面形は、明石市住吉神社が少々扁平形だが、他はほぼ正方形とし、加古川市上荘神社では後座まで続く本舞台との一体式である。専用屋根は4社で下屋(図11)が付き、2社は軒出が深い為か付けない。

iii. 橋掛：橋掛角度は、野外、屋内の設置場所に影響されることは論究を待つ迄もないが、古くは後座後方に付けられ、時代が新しいほど角度が緩くなり、90度に近付くとする論究⁴⁵⁾がある。

当該能舞台の橋掛は、社殿類型タイプI・IIは比較的常設とし、タイプIIIでは揚床式とするなど21社で現存、9社が廃絶である。その角度は、神戸市西区春日神社：60度が最も鋭角とし、明石市住吉神社：64度、70~80度前後が8社、90度が10社、加古川市稲根神社では逆角度の104度である。したがって、橋掛角度を決する要因は、比較的鋭角な能舞台では江戸初期の舞台が多く本格的な舞台形態や設備を整え、鈍角から直角とする舞台では社殿、長床、鏡の間との構造や接続方法との関係、二ワ・棧敷奥行を確保するための背面余地、傾斜地など土地の制約、そして前述の時代的な傾向が考えられる。

4. おわりに

本稿は、兵庫県の神社に現存する51棟の能舞台・演能場を対象とし、能舞台・演能場に関する設計学理について論究した。最後に、建築計画の立場から本論を以下に要約する。

- (1)分布圏は県リストにある加古川流域を主とした県南部である。
- (2)そして社殿構成は能舞台が加わる「普通一般的形式」が多い。
- (3)その社殿構成において、能舞台は本殿の建つ「神聖区域」に正対し、「清雅区域」とする二ワ進入部に建つ事例が多い。

(4)その空間構成は、境内入口の一の鳥居から正参道を進むと、割拝殿・能舞台・長床の建つ棧敷となる二ワへ到着し、その上段に内拝殿・幣殿・祝詞殿、そして最上段に向拝付き本殿が建つ。

(5)境内の動線計画は、参道を社殿中心軸上とする場合、または参道軸線を社殿中心軸から社殿に向かって左へ平行移動した場合は地謡座側とする能舞台左を参拝路とする。

(6)次に、参道軸線を社殿中心軸から右へ平行移動した場合は橋掛を仮設とするか一間を揚床式とし、二ワ外側に迂回路を設ける。

(7)この場合、舞台右手に楼門や二ワに面して社務所や長床などの施設が建つか同方向に脇道を設ける事例がある。

(8)棧敷構成は、拝殿と能舞台間の二ワや長床・拝殿を使用するが、二ワの本殿・拝殿への参拝路を占有する。

(9)能舞台平面形は、本舞台と後座が一体化した事例が最も多く、建設年代が特定される舞台に限ると、タイプA・C・Dは江戸前期から中期に掛けて多く、タイプBに限ると江戸後期とされる。

(10)能舞台平面の設計論は、江戸初期から京間・中京間・関東間などを基準値とし、本舞台は三間、二間半、二間の3段階の大きさとする事例が多く、建設年代が特定される舞台に限ると、特に八尺間二間式と二間半式が比較的多く採用されたように思われる。

(11)鏡板は、常設する社は少なく、管柱を1～3本立てた下見板無しとするのは自然条件の中で維持が困難であったものと考えられる。

(12)橋掛接続角度は、江戸初期や比較的本格的な構えの舞台では鋭角とする傾向があり、二ワや棧敷空間の確保、接続部の構造的処理、時代的な傾向などから浅くなってきたものと考えられる。

以上から総括すると、兵庫県神社境内における能舞台・演能場構成において設計学理として体系化されていたとする論拠は十分とは云えないが、少なくとも当該神社では祭祀芸能施設とする演能場として、ある種の制約・規格・標準化が図られていたものと考えられる。八尺間・京間・中京間・関東間などの混在する設計論が展開する中で、論拠とした能舞台設計論と『書上』における二ワ(場)による設計概念などから、社殿構成における能舞台・演能場を構築する各種条件および能舞台平面形の展開過程が確認できたものと考えられるが、さらに歴史的な考察はその伝播過程とともに解明される必要があり、今後の課題とする。

謝辞

本研究に際し、平成16年度科学研究費補助金、日本工業大学特別研究費補助の援助を受け、調査に際しては各神社の宮司、氏子総代、宮守、関係各諸氏、および兵庫県・各市教育委員会の各諸氏のご協力と大変貴重な資料や情報のご提供を頂きました。ここに改めて感謝する次第です。

注)

- 1) 能勢朝次『能楽源流考』岩波書店1938.11、豊富な調査資料から猿楽座発祥地や時代考証を行っている。
- 2) 池内信嘉『能楽盛衰記』東京創元社1992.10、豊富な能楽史調査資料であり、能舞台に関する歴史的な論究も行っている。
- 3) 今奥兵衛平正隆『愚子見記』、太田博太郎監修『注釈愚子見記』井上書院1988.6：京都御大工頭中井家に属する頭領であった今奥兵衛平正隆が完成させた近世初期の建築書とされ、舞台寸法「三間四方、後座九尺、腋座二尺四寸」「禁中舞台 弘三間四方、後座一間半、脇座間半」など。
- 4) 能舞台研究は、後藤慶二『日本劇場史』岩波書店、1925.11、竹内芳太郎『日本劇場図史』壬生書院、1935.10、須田敦夫『日本劇場史の研究』相模書房、1957.5、などに舞台様式や発展形などを考察。

- 5) 西和夫『祝祭の仮設舞台』彰国社1997.12、能舞台に限らず神楽殿など佐渡の能舞台を含めた仮設舞台に着目した研究。
- 6) 平内正信『匠明 殿屋集』慶長13年(1608)、木割書としては日本最古のものとされる。昔は泉殿ト云り、間八三間ニして、後座九尺ニすへし。ここでは京間と考えられている。
- 7) 瀬河政重『新編武家雜形』明暦元年(1665)
- 8) 山崎純、岡本真理子、河田克博、麓和喜、仙田満、内藤晶『屋敷雑形における能舞台の研究』日本建築学会計画系論文集、第504号 pp219-226、1998.2。廊内の能舞台に関する設計学理の研究。
- 9) 新潟県佐渡島に関する能舞台研究は、新潟県教育委員会『佐渡の能舞台』、若井三郎『佐渡の能舞台』1978.7。宇野浩生、土本俊和、菅川明『佐渡、若狭能舞台の平面構成』日本建築学会計画系論文集、第554号、2002.4、pp139-146。磯辺邦夫『佐渡若狭能舞台の平面構成』に対する討論』日本建築学会計画系論文集、第575号、2004.1pp207-208。福井県若狭に関する能舞台研究は、宮田浅夫『若狭における能舞台について』研究雑誌、1983、1986、大岸文夫他『福井県若狭の神社に現存する能舞台などに関する研究』その1.種類・分布・方向性について、その2.形態に付いて、日本建築学会関東支部研究報告集計画系、1995.3
- 10) 北尾春道『国宝能舞台』洪洋社、1943.5、能舞台の形成に至る5つの舞台形式と、拝殿・神楽殿からの進化過程を論じる。
- 11) 平野庸脩『播磨鑑』宝暦12年(1763)、古書、社寺名所旧跡を探究。兵庫県能舞台研究グループは本書を基幹資料として「農村舞台」の探究。
- 12) 兵庫県神職会『兵庫県神社史、上・中・下』1938.11、県内の神社を県社・郷社・村社に分けて各社の由緒、境内、社殿などの調査・編纂。
- 13) 名生昭男他『歴史と神戸』神戸史学会、10巻5号、11巻5号、12巻6号、13巻6号、14巻6号、15巻6号、16巻6号、17巻6号、19巻6号。
- 14) 名生昭男他『兵庫県の農村舞台』和泉書院、1996.3、13)の大成版。
- 15) 黒田龍二『朝日百科 日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅 神社建築と祭り』『神社と神社建築をどうみるか』朝日新聞社2000.2
- 16) 『丹波・水上郡志』『美濃郡誌』『新修加東郡誌』『作用郡誌』『加西郡誌』『但馬郡誌』『加古郡誌』『高砂市史』『神戸市史』『姫路市史』
- 17) 12) 前掲。
- 18) 『式内社調査報告 第18巻、第19巻、第22巻』皇学館大学出版部、1965
- 19) 『神戸の民俗芸能 第1巻～第6巻』神戸市教育委員会、1964.3、大森恵子『年中行事と民俗芸能 但馬民俗誌』岩田書院、1998.11、『ひょうごの民俗芸能』神戸新聞総合出版センター、1998.12、『丹波の祭と民俗芸能』神戸新聞総合出版センター、1996.4、喜多慶治『兵庫県民俗芸能誌』錦正社、1952.9、県内の芸能伝播経路を探究。能・狂言と拝殿、舞殿、境内の演劇空間が注目される。
- 20) 3) 前掲。
- 21) 『書上』享保6年(1722)、観世太夫が江戸幕府へ提出した書。
- 22) 山内泰明『神社建築』神社新報社、1975.8。
- 23) 『兵庫県宗教法人名簿』兵庫県宗教連盟、2002、では「神社本庁」3839社とするが、12)を手掛かりとしたため、本論では2140社を対象とする。
- 24) 角田一郎『農村舞台の総合的研究 歌舞伎・人形芝居を中心に』桜楓社、1971.5、『農村舞台』を定義。
- 25) 19) 前掲。
- 26) 池田輝政(1564-1613)、織田信長・豊臣秀吉に仕え、関ヶ原の戦で徳川家康に属して功をたて、播磨を拝領しさらに備前・淡路を得る。
- 27) 『兵庫県史第4巻』兵庫県、1954、特に、近世に発達した宿駅と街道、河川交通の発達が発達が芸能伝播に大きく影響したものと考えられる。
- 28) 林屋辰三郎『座』の環境』淡交社、1986.3、神社の祭祀・運営を目的とした集団で、制限を伴う座衆を構成して神事に際して神の巡行に奉仕し歌舞を奉納する。芸能集団の関係から「座」の呼称が生じたとする。
- 29) 22) 前掲。「一直線型」：参道の形式を7分類とした中の1形式。
- 30) 22) 前掲。他に「春日形式」「神明形式」「住吉形式」が該当。
- 31) 22) 前掲。(1)神聖区域、権殿の位置を(2)神蔵区域、祝詞殿・拝殿の位置を(3)清蔵区域、奉務と参拝、社務所、神楽殿建つ(4)清雅区域、休憩所、絵馬殿、舞台の建つ(5)自由区域に分類され、ここでは(1)(2)の区域。本地域の能舞台は(3)の区域とされる。
- 32) 22) 31) 前掲。
- 33) 22) 31) 前掲。
- 34) 22) 前掲。「鑓型」とした分類の1つ。他に「平衡型」が該当する。
- 35) 復刻版『明治新撰播磨名所図絵全』中外書房、1975.2、初版：明治26年(1894)、境内の絵図に能舞台が描かれ、舞台廃絶の神社も含まれる。
- 36) 『三木の祭』三木市観光協会、2002.4、明治時代(1770年代)および文政8年(1825)棧敷割図。町毎の棧敷割が掲載される。
- 37) 篠山市教育委員会『篠山の文化財』1993、能楽愛好家の藩主青山忠良奉納とされる。
- 38) 本舞台は仕手柱、管柱、脇柱、見付け柱で囲まれた部分。
- 39) 『重要文化財沼名前神社能舞台修理工事報告書』社記によると伏見城の遺構とされ、万治年中(元年1658)頼祇園社に寄進とされる。
- 40) 西和夫『建築史研究の新視点 建築と民俗・芸能・技術・地震』中央公論美術出版2000.12「第七節 一間の長さの変遷とその地域分布」
- 41) 『結構書』甲良家、大島登株氏所蔵の図、御本丸表御舞台：京間3間。
- 42) 4) 前掲。
- 43) 40) 前掲。
- 44) 12) 13) 19) 前掲。
- 45) 山崎静太郎『能舞台新古鑑別』の事』建築雑誌第285号、pp469-478、足利中期以降に斜となったとし、寛正0°、天正45°、慶長60°、明治80°と図説・考察される。

(2005年3月10日原稿受理、2005年9月2日採用決定)